

旅の道草 なにがし

首途

この春以來住みなれし越路なる新發田をあとに、筑紫なる豊前の國に出で立つ。多くの人々町はづれまで送りす。また瀧車の便だになき所とて送る者送らるゝ者互に思ひ切りのわるき事限りなし。されどやむべきにあらねばやがて人力車を走らす。數丁も行くほどに後よりあへぎく馳せ來る人のけわひす。かへり見ればなごりなして逐ひ來し一人なりけり。互に言葉はなくて只目禮せしのみなるに、車は忽ち前に人は後に相遠かる。やがて又もや驅け來るものあり。かたみに目禮して忽ち別るゝ前の如し。おひすかかり相別るゝ一殺那に千万無量の情あり。人の心は只時此こそ清らかなりけれ。

萬代橋

万代橋の長しといふ事はかねてより聞きしかど今渡りていよく其長きに驚きぬ。名所といふ名所來て見れば噂ほどのものならぬは世の常なれど、此橋のみは聞きしにも思ひしにもまさりて長きものかな。車をはしらせて行けどもくたつ橋の上なるには呆るゝばかりなり。かゝる橋の下を流るゝ信濃川の水の海の如くなるも理なるべきに、さて其川口なる新潟の海いと淺くして港の用をなさぬとは何事ぞや、實に新潟は只万代橋のみぞ見るべかりける。

善光寺

雨を冒して善光寺に詣づ。山門の前通り一面に石を敷きつめ其兩側に商人の軒をつられたる、淺草にも似たりけり。山門の右手に塔の様したるホルマリソ石燈の廣告の仰々しさ、世の中の無風流

といへるものを一つに集めたらん心地せらる。本堂其他の堂塔のいたるところ種々なる名の下に善男善女より財物を淨捨せしめんとするは、例の古刹保存の上には必要なるべけれどさりとは又うるさきものなるかな。

碓氷の紅葉

ふりはへて訪ふ人あるを、道すから見んとする此旅、いとうれしとたのしみけるに、何事ぞ。霧いと深くして碓氷の山は紅葉の影だに見えず。わづかにわが乗れる瀧車の左右數尺の處を辨するのみなるぞうらめしき。あの霧のあなたにこそと思はるゝも甲斐なし。

霧を深みうすひの山はもみちはの
にしきのあやも見られさりけり

幼稚園

年久しく住みたりし都の、來て見れば一しほなつかしきに。わきて年頃日毎に通ひし幼稚園の有様や如何ならんと第一にたづね行きてけるに、多くの幼兒は皆われを忘れもせて親しげに寄り添ふさまこよなく愛らし。あはれ今急ぎの旅路ならすばなど思はるゝもせんなし。されど時の間に又相別るる身とも知らぬ無心の兒等はかつて每朝袴の裾にまつはりし時と變る事なく威勢よく、『先生おはやう』『先生おはやう』と時は巳に正午を過ぎたるにも拘らず口々にかく呼はりつゝ集り來るに、われは只胸塞りて何となく涙さへ催しぬ。心とりなほして『さようなら先生は又來ますよ』と別れを告ぐれば、いづれも呆れたらんおも、ちして見送る兒等の様、けに無心とはこれなりけり

雪の富士山

見れどあかぬふじのみやまよ。いざ其清き姿をとほかり都を出て立ちし甲斐もなく、雲深くとさして麓だに見えず。年頃喫りおきし友をたづねたるに其人の不在なりしにも似て口をさし

掛川の里

越の國にて朝なく愛てにし朝顔のはやく枯れはてければぬきすて、立ち去りしを信濃路を京都をよぎりて今遠州掛川の里に來て見れば、所々の垣根にまだ咲きのこれも面白し。夏はまだ此あたりにさまよへるにや。はた此あたりの夏は今や行かんとするにやとをかし。

行く夏をまたも見よとや朝顔の

かけても咲くか掛川のこと

沿道の秋色

遠近の山々は已に雪をいたゞき、早稲田は早く蒔り乾され、人は多く綿入を着たる越路を立を出てて信濃路に入るほどに、谿間の紅葉今ぞもなかと染めなされいと面白く眺められしを。碓氷を越えて都に近づくに従ひて野山の色まだ緑深く稲はなほ田にありこのあたりには、佐保姫のいまだ影だに見せぬるやといふかりつゝ都に入れば、げにや人は皆裕を着たりけり。重着したる身の何となく、うらはづかしきこゝちせらるゝもをかし。更に都を立ちいで、東海道を過ぐるほどに氣候はますく暖かく、野山はいまだ錦を着けず、木々の色更に夏に異ならず、掛川にやどりけるに宿の女はいまだフラネルの單衣を着たり。あはれ北の國より南の里、山のあなたよりこなたとつきづくに染めもて行けばこそ佐保姫も心しづかにうつくしく秋の錦を織り出さるゝなれと、遠近の景色を

見るに付けても思ひ出さるゝは旅路の一興なるべし。

浪華の一夜

わが故郷なる和歌山に近き浪華の都は、曾てしばしばよぎりしはく々とまりて親しき地なるを、まして此旅にはおのれらに對面せんとて丹後より、紀州より母と兄とふりはへて出で來ませるが在れば、心をどるばかりにて梅田の停車場に着きぬ。車を走らせ町を過ぎ行くに、車のあまたたび橋の上へとゝろかし行くはけに或人の言ひげんやうに大坂は水の都なればなりけり。行きかふ人の心せはしげなる實に大坂はいつ見てもいそがしき都なりけり。されど燈の下に親はらからうちつどひて四方山の物語に夜の更くるをも忘れたるは、水の都といへど冷やかならず、秋とはいへど春の風吹く心地して、いそがしき土地もこゝのみはのどかにぞ覺えし。ことし還曆の祝したまへる我母の各地に住める子等をつむしろに集めたるうれしき。満足とは此事とも言ふべきおも、ちしたまへるいと嬉しく。碓氷の紅葉富士の白雪ばものかは、此母のこのえがほ見しこそ此旅行中の最も大なる喜なりしか。

年をへて母と語れば秋の夜も

なかきものとは思はさりけり

月の須磨

あかぬわかれを人々に告げて浪華の都をあとにしつる夕、須磨舞子明石のあたり月清く浪白く松只黒く其けしき得も言はれぬさまなり、畫ならば幼き頃讀本にて地理書にて誦じげんやうに白沙青松相映すべけれど、月の光には物皆只白く黒く風のやうなる色の際だゝぬところに一しほのおもむきあり。今は瀛車といふ文明の利器のおそろしき早さもて驅けぬくる此あたり、そのかみ歌仙人

磨もだいすまれしなり行平朝臣もさすらひしなり、などひとりかにかくと古を忍びてあかす見まもるほどに、瀧車は容赦なく進みて早くも身は播磨路深く運ばれぬ

わくらははにおりてとはまし須磨の浦や

もしほたれけん人のなこりを

月姫の立ち舞ふ袖にかよふらん

まひ子の涼の松風のおと

明石湯歌のにじりのおもかけを

うつすこよひの月のさやけを

嚴 島

名にしあふ安藝の宮島、我國三景の一と何才の頃よりかきなりしけん。物の本に繪に寫眞に人々の話に見聞してはやくより我心の中に加えられつる宮島はいと小さきものなりき、そは神社の宏壯なるをのみ主として想像したればなり。書物の繪解なども多くは宮居と島居とのみなればなり。即ち殿島といふ島は神社のあるが上に只幾許かの人家あるのみにて、かの江の島と大差なかるべしと思へりしなりき。今このあたりを初めて通る我身の瀧車の中より眺むれば、こはいかに島は我頭の中に加えたるそれに増して更に其幾倍なるを知らず。其思の外なるに呆れて同行の人に笑はれしぞはづかしき。げに百聞は一見に如かずりけり。足かの島の地を踏み親しく宮を拜したらんには、宮のかうくしさも島の大きなる事もさらに明らかなるべけれど、急ぎの旅にはこれもせんなし。只島の大ききの我あやまりをとき得たるをうれしと思ふ間もなく大島居の影は見えずなりぬ。あはれ人に語らんもはづかしきは我あやまりなりけり。

關門海峡

地圖にえがられたる此海峡のへだりを見て、およそこれほどなるべしと例の我頭にえがき居りしを、一とせ都にありける時ある夜人と忍ばずのあたりをそつるありきして、池のあなたの家家の燈火のつらなれるを見て其人の、馬關より門司を見るは此景色に似たりと語るに足まだそこに至らぬおのれは、さばかり近きや我想はかりきなど語りし事のありけるが、今親しく其地を踏み門司の燈火を此方より望みていかにも忍ばずに似たるかなとたしかめぬ。あくる朝船にて馬關より門司に渡るに、水深けれども狭き此海峡かの巨船ミネソタの通り得ぬもことわりなり。さてはかゝる狭きところの水いと深きもあやしく、太古の歴史にも早瀬の瀬戸の名の見ゆるを見ればそのかみのこゝも今に變らざりけんなどとりまぜて考ふるほどに山陽鐵道の連絡汽船は早くも門司の棧橋に着きぬ。雁と共に越路を立ちて碓氷に霧をうらみ、掛川に残れる夏をしたひ、須磨明石の月をめで、殿島の宮をはるかにるがみたるわれは、かくしてつひに筑紫の人となり了りぬ。

編輯記事

本號には宮川壽美子女史の家庭に関する記事と近藤耕造氏の火なしかまと實驗談とを載する筈でありましたが、兩氏とも非常の多忙にて原稿不切迄に間に合ひませんでしたから次號に譲ること、致しました。

短歌三光には御約束の通り賞品として本誌を月々差上ますから御希望次第至急受取人を御指定下さいまし